

橿研 通 Vol.2 信

あなたと遺跡の新しいつながり方をみつける情報紙

第 2 号 目 次

- 特集 「考古学」の楽しみ方 「ミステリー小説からみた考古学の世界」 1
- 国際シンポ「ユーラシアからのまなざし」 3
- 奈良の世界遺産と考古学(2) 大峯奥駈道 大峰山～小笹宿～弥山 5
- 奈良考古情報 銅鐸を飾る様々な文様 9
- 奈良の史跡 公開活用(2) 田原本町 唐古・鍵遺跡 11
- 考古学研究交流 「東アジア、そしてユーラシアへ」
 - 韓国国立羅州文化財研究所 李志映 学芸研究士 13
 - 中国寧夏回族自治区寧夏文物考古研究所 馬曉玲 副研究員 14
- 催し案内

表紙写真：伝奈良出土 流水文銅鐸

研究者が読む「推理小説の中の考古学」



写真：左からアガサ・クリスティー・加島祥造訳『ナイルに死す』、石田善彦訳『メソポタミヤの殺人』（ともに早川書房）、
松本清張『内海の輪』（光文社文庫）

ミステリー小説からみた考古学の世界

「発掘をしているうちに何かみつかる」と、そのまわりを広く整理をして、くずれた土はすっかりとりのぞき、その物体に別の物がついていたら、ナイフできれいに削り落とし、最後にその物体だけぼつんと残り残されるようにするのです。そうすれば、外部の無関係なものに邪魔されないで写真もできるし、写真にとることもできるわけですね。いま、私がやっていることがそれなのです。事件とは無関係な、まぎらわしいものを全部とりのぞいて、真実だけがみえるようにする。むきだしの、無垢な真実だけが——エルキュール・ポアロ（アガサ・クリスティー『ナイルに死す』2003年、加島祥造訳、早川書房、pp.26-27、1937年発表）

◆小説と考古学

私は読書を趣味としていて、年間150冊ほど小説を読みます。文芸作品や時代小説なども読みますが、ほとんどがミステリー（推理）小説です。小説の中で主人公の探偵や刑事は、犯

人が残した証拠の積み重ねから犯人を推理します。冒頭で挙げたように、アガサ・クリスティーが生み出した名探偵エルキュール・ポアロは、推理の思考を説明する中で、発掘調査の方法との類似点を語っています。その推理を導く過程も、発掘調査や出土した遺物で確認したささいな痕跡・事実の積み重ねから、過去の社会や生活を復元することを仕事にする私たちと、似ているところがたくさんあります。

◆アガサ・クリスティー

小説の世界には、考古学に関連する人や遺跡がたびたび登場します。海外では冒頭に引用したアガサ・クリスティーの著作が有名です。「メソポタミヤの殺人」（1936年）は発掘調査団の中で事件が起こります。また短編「エジプト墳墓の謎」（1924年）でも、エジプトの発掘調査団内であたかもファラオの呪いのように死者が発生していく事件を解決します。小説ではありませんが、ドラマ版『名探偵ポアロ』『死との約束』（2009

年、London Weekend Television）では、舞台がシリアの発掘現場に変更されています。その他の作品にも考古学者や遺跡、考古学用語がたびたび登場します。これらには、クリスティーが1930年に再婚したマックス・マローワンが14歳年下の考古学者で、彼の発掘調査（西アジア方面）に同行していたことが背景にあるでしょう。クリスティーは単に同行するのではなく、現地において土器の実測・復元や写真撮影を行っていたようです。

◆松本清張と森本六爾

日本では松本清張の名が第一に挙げられます。早世の考古学者森本六爾（1903～1936年、桜井市出身）がモデルとされる「断碑」（1954年）、明石原人とその発見者の直良信夫（1902～1985）を題材とした「石の骨」（1955年）、須恵器の器種の一つである甕（はそう）が主題の「甕壺」（1955年）など、多くの作品を発表しています。その中でも内容に考古学が大きく絡むミステリーとしては「内海の輪」（1968年）が代表的です。主人公は新進気鋭の考古学者で、弥生時代の「高地性遺跡」を研究している人物です。彼が不

表：考古学関連ミステリー小説一覧

刊行年	作者名	タイトル	出版社・レーベル
1948	島田一男	古墳殺人事件	自由出版
1969	松本清張	内海の輪	カッパ・ノベルス (光文社)
1974	横溝正史	仮面舞踏会	講談社
	高木彬光	邪馬台国の秘密	カッパ・ノベルス (光文社)
1979	島田一男	埴輪の柩—縄文殺人事件	桃源社
1983	阿井渉介	卑弥呼殺人事件	講談社ノベルス
1984	内田康夫	明日香の皇子	角川文庫
1985	島田一男	卑弥呼塚殺人事件	光文社文庫
1986	中津文彦	縄文土偶殺人事件	フタバ・ノベルス (双葉社)
1988	黒川博行	8号古墳に消えて	文藝春秋
1989	深谷忠記	「邪馬台国の謎」殺人事件	光文社
1995	井沢元彦	卑弥呼伝説 地に降りた神々	実業之日本社
1992	深谷忠記	飛鳥殺人事件	光文社
1996	井沢元彦	魔鏡の女王	読売新聞社
1998	鯨統一郎	邪馬台国はどこですか？	創元推理文庫
	柄刀一	3000年の密室	原書房
1999	柄刀一	4000年のアリバイ回廊	光文社
2001	内田康夫	箸墓幻想 (浅見光彦シリーズ)	毎日新聞社
2002	北森鴻	触身仏 (蓮杖那智シリーズ)	新潮社
	中津文彦	邪馬台国の殺人	カッパ・ノベルス (光文社)
2009	西村京太郎	吉備 古代の呪い (十津川警部シリーズ)	中央公論新社
2010	吉村達也	卑弥呼の赤い罠	集英社文庫
	吉村達也	飛鳥の怨霊の首	集英社文庫
	化野燐	考古探偵—法師全シリーズ (～2012 まで4冊)	角川文庫
2011	北森鴻・浅野里沙子	邪馬台 (蓮杖那智シリーズ)	新潮社
2013	風野真知雄	縄文の家殺人事件	だいわ文庫 (大和書房)

倫相手を殺害し、その後の発覚に怯える心の動きを描く、いわゆる倒叙ミステリー²⁾で、兵庫県の「高地性遺跡」やそこから出土した「畿内第三様式土器」・「細型銅剣」・「ガラス釧」などの遺物が登場し、物語に奥行きを与えています。さらに松本清張はこれら小説だけにとどまらず、多くの古代史に関する論説・随筆を執筆しています。

◆世相と小説タイトル

最後に、考古学が登場する日本のミステリー小説を少しだけ集めて、表にまとめてみました。この表に挙げた小説は、全体からごく一部を抜粋しただけのものですが、そのタイトルと内容からは二つのことが読み取れます。ひとつ目は、ある時期からタイト

ルに「邪馬台国」・「卑弥呼」が含まれる小説が多く現れることです。これは1960年代後半から起こった「邪馬台国ブーム」を反映したもので、1980年代にも佐賀県吉野ケ里遺跡の報道発表などが、白熱した所在地論争を起しました。吉野ケ里遺跡も報道発表以降、よく登場するようになりました。これらの小説の多くは、探偵役が犯罪事件を解決するとともに、邪馬台国の所在地を明らかにする、というような「歴史ミステリー」の形態を採っています。このほかにも、縄文時代の名の付く小説には、青森県三内丸山遺跡や土偶などがよく登場します。

ふたつ目は、2000年代以降に遺物の「ねつ造」を内容を含む小説が現れることです。2000年に発覚した「前・中期旧石器問題 (旧石器ねつ造事件)」を受けてのものだと思われます。TVドラマでも「地の塩」(2014年、WOWOW)など、「ねつ造」をテーマにしたミステリーが放映されています。以上のように、ミステリー小説に描かれる考古学の世界は、マスメディアなどで話題となった事がらと大きくかわっています。

さて、次に小説に描かれる考古学の世界は、どのような世界でしょうか？

私たちはポアロのように日夜「灰色の脳細胞」を働かせながら、魅力あふれた考古学の世界が、小説に登場することを願っています。

註

- 1) 大津忠彦2016「Agatha Christie 著『Murder in Mesopotamia』における考古学」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』11 筑紫女学園大学 pp.89-101

- 2) 犯人側を主軸として物語が進行するミステリーの一ジャンル。TVドラマでは「刑事コロンボ」や「古畑任三郎」などが代表的。

- 3) 松本清張と考古学については、大津忠彦氏が詳細な研究を行っている。

- 4) 内容に歴史上の謎を解決することを含むミステリーの一ジャンル(例・本能寺の変の首謀者は誰か？イースター島のモアイはなぜ作られたのか？など)。

- 5) ポアロが推理途中によく口にする台詞。自らの脳細胞を指すだけではなく、時には他人に働かせることを促す(「ゴルフ場殺人事件」など)。

きぬはた あゆむ
絹島 歩

調査課 主任技師

プロフィール

- 岡山県生まれ。九州大学大学院人文科学府修士課程修了。2012年榎原考古学研究所採用
- 専門は古墳時代の考古学。主に秋津・中西遺跡などの調査を担当。

◆本事業は、文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」の一部です。

慶応大学言語文化研究所 所員 青木 健氏

土品、そして宗教行事等に、いまでもそれを見て取ることができます。

こうした歴史が色濃く残る奈良県には、国内外に向けて、歴史文化に関する情報発信の拠点としての役割が期待されています。今回のシンポジウムは、東アジア世界の文化形成に影響を与えるユーラシア大陸規模での文化交流に目をむけ、日本文化の基層に流れる国際交流の記憶をよびさます、新しい視点を皆様にご提供することを目標としました。

開催趣旨

土品、そして宗教行事等に、いまでもそれを見て取ることができます。

西北大学と共同開催の成果

西北大学は、中国陕西省西安市にある1902年創立の総合大学であり、同大学文化遺産学院は、中国の大学で最大規模の考古学・文化財学部です。

樞考研と同大学は、1990年から研究協力を始め、樞考研10人、西北大学7人の研究者の交換研修をおこないい、研究協力を深めてきました。そうした背景のもと、2014年から両機関でシンポジウムの準備を進め、文化庁「平成28年度地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」の一部として採択され、実現しました。

シンポジウムでは、最新の成果が発表されました。汎ユーラシア規模の東西文化交流が新石器時代に遡ることや、東西文化交流に活躍した^{だいげつし}大月氏等の古代民族の実態解明、中国新疆地域の古代寺院の調査成果にみる飛鳥時代寺院の伽藍配置の起源、そしてソグド人が伝えた古代イラン文化の日本に与えた影響等、内容は多岐に及びました。

いずれの研究も、汎ユーラシアの古代文化交流を解き明かす新しい視点です。樞考研と西北大学文化遺産学院では、今後も協力して新しい成果を公開する場をもつことを相互に確認し、シンポジウムを終えました。



1月14日の基調講演（陳洪海氏／西北大文化遺産学院院長・教授）の様子



1月14日の質疑（質問に答える冉万里氏／西北大学文化遺産学院教授）

大峯奥駈道(2) 大峰山～小笹宿～弥山

シリーズ
奈良の世界遺産
と考古学
第2回



写真1. 大峰山～行者還岳(弥山より)



写真2. 小笹宿

写真3. 笹ノ窟



こぼれ出る笹ノ窟のしずくの水
長き夜残る法のともしび 四空



写真4. 岩壁の鎖場



写真5. 岩壁の栈道

大峰山―弥山の奥駈道

大峰山寺本堂から、「里程標起点」碑を横に、大峰山山頂の東斜面を下ると、長く険しい奥駈道に本格的に入ります（写真1）。この先、現在も残る宿は、下北山村前鬼の小仲坊と、十津川村玉置山の玉置神社だけで、弥山小屋を除いて他の山小屋は無人です。

▼小笹宿

トウヒやブナ・ミズナラの森の苔道を行くこと約30分余りで、小笹宿に到着です（写真2）。小笹宿は、当山派修験（本山、醍醐寺三寶院）の峯中修行の根拠地で、多数の宿坊跡の平場が周囲に広がっています。現在は、行者堂、寛文八（1668）年銘のあ

る理源大師像、元禄九（1696）年銘のある護摩炉などが残ります。

ちなみに、小笹宿の次の水場は、行者還岳東の行者霽水までありません。奥駈の困難さの理由のひとつが、安定した水場が少ないことにあります。

▼阿弥陀森から大普賢岳へ

竜ヶ岳を越えると、阿弥陀森という深いトウヒの森に入ります。風倒木の間を抜け、脇宿へ下りはじめた所に、女人結界門があります。門前からは、川上村柏木へ通じる道が分岐します。脇宿には、中世の土器片が散布します。ここから道は登りになり、樹間に大普賢岳東尾根の壮大な北壁が見えはじめます。経函石の西をぬけ、北の小普賢岳を越えると視界が開け、奥駈道

は大普賢岳に向けて笹原を進みます。

▼笹ノ窟

大普賢岳の東尾根を進み、日本岳の南壁を下った所に、いくつか岩窟が開いています。そのひとつが笹ノ窟です（写真3）。奥駈道から離れた峯中の行場であり、荒行である冬季の参籠もおこなわれました。西行も「露もらぬいはやも袖は濡れけりと聞かずばいかげ怪しからまし」と詠み、厳しい行を伝えています。

笹ノ窟には、鎌倉時代の不動明王像（県指定）が伝来します。いまは地元（財）天ヶ瀬組から、奈良国立博物館に寄託されています。1993年の同窟の発掘では、同像の破片や平安時代に遡る遺物が出土し、平安時代以来

の行場であることが実証されました。

▼大普賢岳から行者還岳へ

大普賢岳から奥駈道は南西に進み、弥勒ヶ岳に登ります。続いて南へ下りはじめ、険しい崖道となります。サツマコロビといわれ、急峻な崖面を横渡りする鎖場が続きます（写真4）。ようやくに稚児泊の広場についたのも東の間、尾根を登って七ツ池を過ぎ、断崖にかけられた栈道（写真5）を渡って、七曜岳の岩峯上にです。

七曜岳を越え、急峻なピークを梯子で下ると、しばらくは緩やかなアップダウンに変わります（写真6）。途中に、須恵器片の散布する場所があります。樹間の行者還岳が、次第に近づいてみえてきます。

写真7. 行者還岳東のサツマコロビ



霧の中に消えていく木階段の連続

写真6. 行者還岳北の奥駈道



心和む山つつじ

行者還岳山頂へは、奥駈道から分かれて20分程で登頂できます。奥駈道は、分岐点から東に迂回し、やはりサツマコロビとよばれる急な坂を一気に下ります。木階段が連続設置されていますが、あまりに急です（写真7）。続いてガレ場状の坂を下り、行者零水で喉を潤し、少し歩くと避難小屋です。小屋の背後には、行者還岳の切り立った南壁がそびえています。

▽行者還避難小屋から弥山へ

小屋から、弥山の東尾根裾にある講婆世宿までは、小さく丸い峯と平坦な鞍部の繰り返しです（写真8）。途中の一の坪（写真9）には平場がのこります。江戸時代までは宿があり、奥駈の足を休める場所でした。

西に転じた奥駈道は、石休宿を越えて弁天ノ森を過ぎ、講婆世宿（聖宝宿）に至ります。元禄五（1692）年銘の理源大師像（写真10）の南には、宿跡の広い平場がのこります。

講婆世宿から弥山までは、比高差約300mののぼりです。約50分の登坂で、弥山山頂（標高1895m・写真11）にある天河弁財天奥宮に至ります。山頂ならびに周辺からは、奈良・平安時代以来の奉獻品等が出土します。

弥山より南に一日の深仙宿までには、1800m級の峯をいくつも越えます。最初の八経ヶ岳（1914.9m・近畿最高峰）の背後に、それらの山々が遠望できます（写真12）。

次号（弥山―深仙宿・前鬼）に続く。

写真8. 行者還岳南の奥駈道



写真10. 講婆世宿の理源大師像



写真9. 一の坪





写真 11. 弥山(山頂背後から右手前に続く稜線が大峯奥駈道、八経ヶ岳より)



写真 12. 八経ヶ岳（左肩に釈迦ヶ岳・仏生嶽、弥山より）

銅鐸を飾る様々な文様

伝奈良（個人蔵・橿考博常設）



写真 1. 伝奈良銅鐸（左）B面、（右）A面

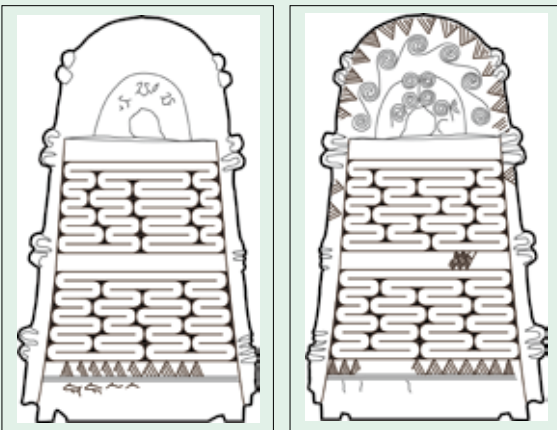


図 1. 文様模式図、左：B面、右：A面

伝奈良銅鐸

銅鐸は弥生時代の青銅器であり、九州北部から、中部地方まで広く分布する祭器です。銅鐸の年代は、巨大化に進む時期を目安にして、大きく二時期に分けられており、古い段階を「聞く銅鐸」、新しい段階を「見る銅鐸」とよんでいます。

伝大和銅鐸（写真1）は、古い段階の中頃（外縁付鈕式・吊り手の外周に縁飾りが付いたもの。弥生中期）のもので、高さ約45cmです。同じ石の鋳型で鋳造された兄弟銅鐸に、倭文（淡路島）、恩智垣内山（八尾市）、木ノ根（津市）銅鐸があります。

▼対称性の破れ

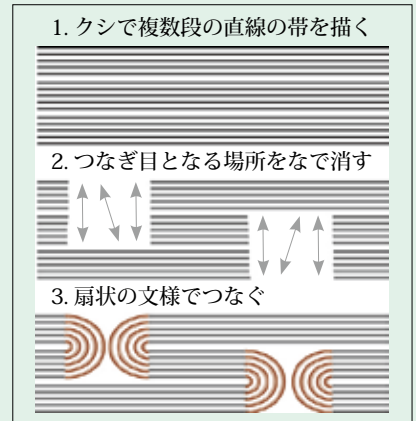
素粒子の話ではありません。古段階の銅鐸は、表裏の關係にある面に、対称にならないように文様を施す、という特徴をもちます。伝奈良銅鐸は、その典型です（図1）。吊り手は、片面が渦文、もう一方の面がカエルです。身は、A・B面ともに上下2区画に分け、流水文を施しています。四つの流水文はよく似ています。しかしよく見ると、区画の内部で、線の束を反転する位置が左右にずれて異なり、4区画相互で異なる流水文になっています。さらに裾に横に並んで鋳出されているのは、A面では鹿（頭・頸）、B面では魚です。

▼流水文の歴史

流水文は、水を描いた文様ではなく、縄文時代末の工字文（図3）とよばれる文様が、複雑になったものです。工字文は、規則的に「工」形の陰刻をおこなうことで、間にのこる粘土が一連の線となり、折れ曲がりながら続く文様で、見栄えは一本線の流水文です。

工字文は弥生時代に引き継がれ、複線にして華美にみせる努力が払われました。弥生時代中期には、複数の線を平行に描く櫛歯状の施文具（以下、ク

図2(下)・流水文の描き方



シ)が登場し、簡易で複雑な流水文を描くようになりました。

▼流水文の描き方

クシ描き流水文の描き方は、比較的簡単です(図2)。初めに、横方向の直線の帯を、クシで上下に2帯以上描きます。次に、工字文の【形陰刻と同様の位置を選び、上下の直線の帯をなでて消します。次に、なで消した上下の直線の帯に対し、クシを半回転させた扇状の文様を入れ、つながります。すると、上段左の直線の帯は下段左の帯へ、上段右の直線の帯は、下段右の帯へと連続し、流水文になります。

既にお気づきのように、流水文の複雑さは、直線の帯をどのように上下でつなぐのか、という点にあります。弥生人の創意は、多様な流水文を生みだし(図4~6)、デザイン化が進み、一筆描きの流水文も現れました。

図3. 工字文(縄文時代晩期)



図4. 横型流水文(線省略)



図5(左)縦型流水文、(右)複合型流水文、(線省略)

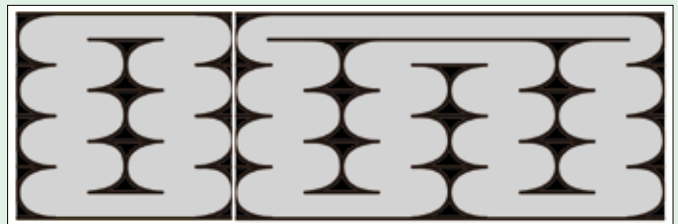
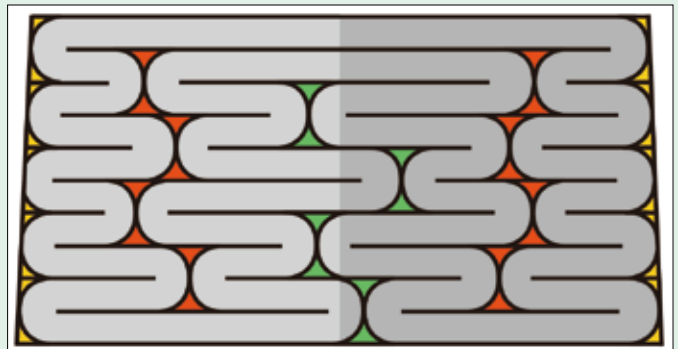


図6. 複合型流水文(写真1右上部の流水文、線省略) 左右線対称(黄・橙色)、中央は非対称(緑色)



▼複雑化する流水文

流水文の基本形のひとつは、反転部を横に並べ、その間々に半段分下げた反転部を横に並べる横型流水文です(図4)。基本形のもう一つは、縦連続の複数列の反転部を、同じ高さで左右端におき、その間に1個数を減じた縦連続の反転部を、半段分ずらしておく縦型流水文です(図5左)。

横・縦型流水文を結合させることで、流水文はヴァリエーションを広げました。図5右は、横並びの縦型流水文を上部で結合した例であり、図6はそれに手を加えて、華美に仕上げた例です。

▽銅鐸文様を読解?!

伝奈良銅鐸の流水文は、図1・6にみるように、表裏対称にならないように、帯文様の反転部の配置を細やかに計算した複合型です。加えて、吊り手や裾に異なる動物を描き、A・B面の文様構成が非対称であることを明確にしています。

銅鐸の文様構成にみる対称性の拒否は、神聖な存在(カミ)に対する弥生人の観念の表現と思われる点で、銅鐸がどのような性格の祭器であるかを、知る手がかりといえるでしょう。仮に、カエル・魚の面が、水(水田)と光の

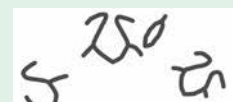
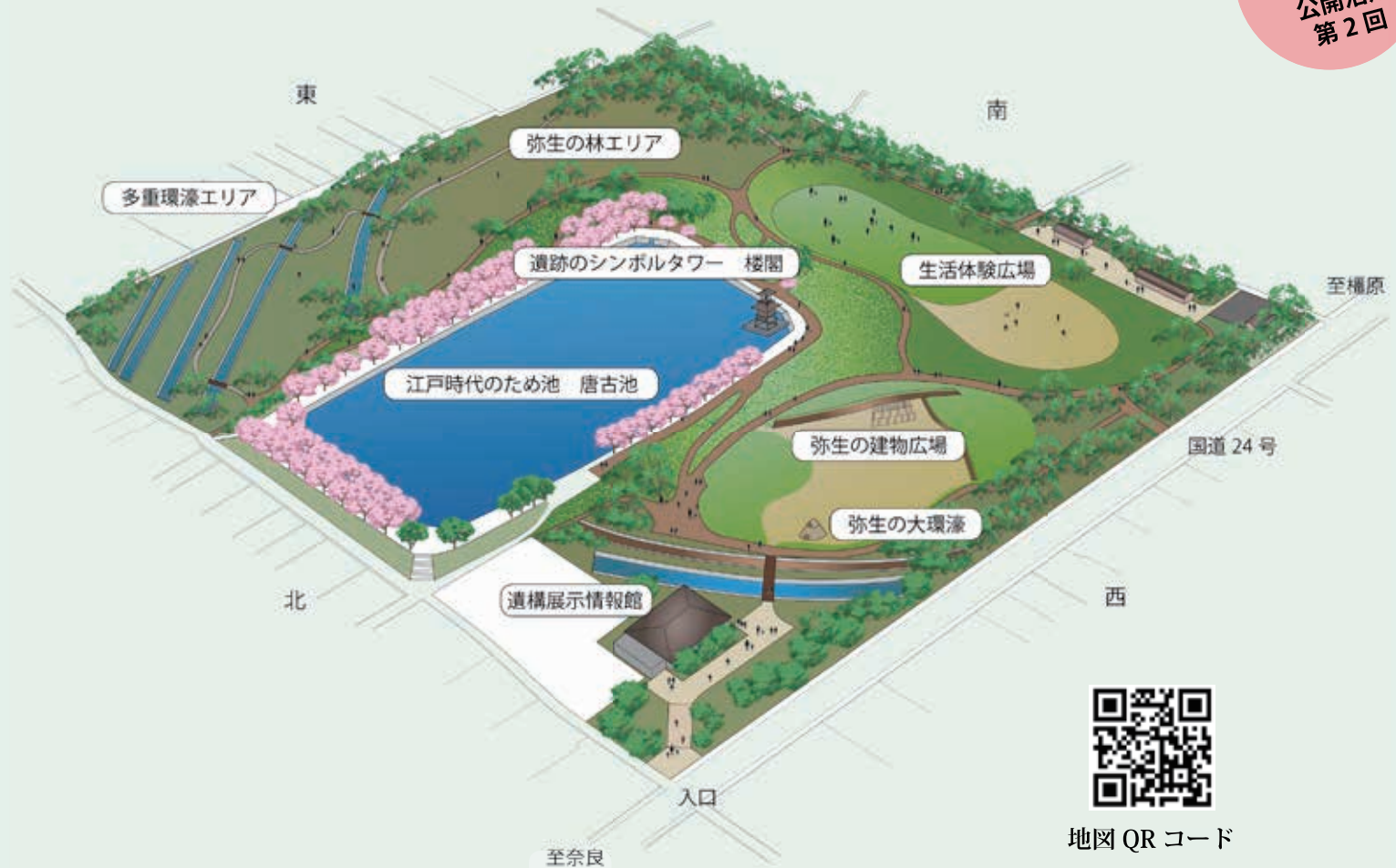


写真2(左)B面裾の魚、写真3(右)B面吊り手のカエルとオタマジャクシ?

世界とすれば、渦文・鹿の面は、山野と闇の世界と読み解けます。弥生人は、その非対称な神性が、合一して銅鐸に宿ると考えたのかもしれない。

皆さんなら、銅鐸文様をどのように読み解かれるでしょうか。



地図 QR コード

オープン：平成 30 年 4 月（予定）、所在地：田原本町唐古・鍵、史跡指定年月日：平成 11 年 1 月 27 日 指定面積：約 101,690.36㎡

交通：鉄道 近鉄樫原線 石見駅下車、東へ徒歩約 20 分

自動車 国道 24 号唐古南交差点より南約 300 m 駐車場あり（工事のため平成 29 年 10 月～平成 30 年春開園まで使用停止）

唐古・鍵遺跡史跡公園 整備完成予想図

▽弥生時代の巨大なムラ 唐古・鍵遺跡

唐古・鍵遺跡は、田原本町の北東部、唐古と鍵の集落にまたがって広がる、弥生時代（約 2500～1700 年前）の大きなムラの跡です。昭和 11 年におこなわれた発掘で、土器とともに木製農具が多数出土し、弥生時代が日本列島で水稻農耕が開始された時代であることを証明した遺跡です。

ムラの周囲には、何本もの大溝（環濠）を巡らしています。環濠の部分を含めたムラ全体の面積は約 42 ㌔に及び、日本列島の弥生時代集落のなかでもトップクラスの規模です。

ムラの中からは、大型建物の跡や、青銅器を作った施設など、一般の集落にはない遺構が発掘されています。また、多くの土器・石器・木器に加えて、青銅器・玉・土製品などの特殊な遺物も多数出土しています。とりわけ絵画土器は、全国出土数の約 2 分の 1 を占める多さを誇り、唐古・鍵ムラの特色となっています。この絵画土器のなかには、全国唯一の 2 階建て建物の「楼閣」を描いたものもあります。楼閣は、唐古池のほとりに復元されて、田原本町のシンボルとなっています。

唐古・鍵遺跡は、遺跡や遺物の重要性が認められて、平成 11 年 1 月 27 日に、唐古池を含むその周辺約 10 ㌔が、国史跡に指定されました。その後、3 回の追加指定を受け、現在に至っています。

▽唐古・鍵遺跡史跡公園の整備事業

田原本町では、遺跡の重要性から史跡指定以前から、遺跡の保存と活用について、様々な取り組みを進めてきました。昭和 63 年 11 月に環境整備基本計画、平成 8 年 3 月に整備基本構想、そして平成 9 年には整備基本計画を策定しました。基本計画に基づき、平成 15 年に整備基本設計、平成 24 年 3 月には整備事業実施設計を決定して、平成 26 年度からは施設整備が着実に進んでいます。

よみがえる弥生の風景

唐古・鍵遺跡史跡公園整備事業

▽ボランティアの活躍

唐古・鍵遺跡史跡公園は広大なために、整備に多くの時間が必要でした。その間、唐古・鍵遺跡の保存に熱意のある人たちが、ボランティアとして遺跡の大切さを伝え、整備後につながる体験学習会などを催してきました。

平成16年4月10日に結成された「唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会」（愛称「唐古・鍵支援隊」）は、唐古・鍵遺跡の保存と活用を通じて、地域社会に貢献することを目的とし、自発的な意志によって活動を行う組織です。平成28年3月現在で、73名の会員がいます。会員は、町内の小学校の総合学習活動の支援、ものづくり教室、唐古・鍵考古学ミュージアムと遺跡のガイド、遺跡の清掃活動など、多彩な活動を展開しています。

また整備工事が本格化した平成27年10月からは、田原本町が「唐古・鍵遺跡史跡公園ボランティア」を募っています。養成講座に人気があり、第3期生の養成にむけた講座が、既に平成28年度10月14日から開催されています。



（上）生活体験広場、（下）多重環濠エリア



▽試験運用の開始

平成27年度工事で、生活体験広場が完成し、史跡公園の試験運用が平成28年度から始まりました。平成28年10月13日には、田原本町立北小学校の6年

▽今後の整備工事

生約30人が、自分の作った弥生土器の土器焼き体験をしました。

田原本町では今後、1年後の完成を目指して、「遺構展示情報館」・「弥生

の建物広場」・「弥生の大環濠」などの工事を進める予定になっています。

平成30年4月予定の史跡公園のオープンが、待ち遠しいところです。

（図・写真提供…田原本町教育委員会）

考古学研究交流 東アジア、そしてユーラシア

◆国立羅州文化財研究所の紹介

国立羅州文化財研究所は、大韓民国文化財庁に所属する文化財の調査・研究専門機関として、朝鮮半島西南部地方の古代文化と地域文化遺産を研究するため、全羅南道羅州市に設立された。三国時代、栄山江流域のこの一帯は、百濟とは異なる古代社会が存在した場所であり、墳丘をもつ古墳が築造され、埋葬施設は主に甕棺が使用されました。甕棺は大型の甕どうしを合わせ口にして、その中に遺骸を安置しました。このような埋葬習俗はこの地域だけの独特な文化です。とくに羅州新村里9号墳の甕棺内からは金銅冠、金銅飾履、装飾大刀などの貴重な遺物が出土し、栄山江流域一帯に、王に次ぐ有力な勢力が存在していたことを表しています。

国立羅州文化財研究所では、このような地域政治勢力の実体を明らかにするため、多様な研究事業を推進しています。その一つが、私が担当する「大型甕棺の生産と流通の復元研究」です。栄山江流域の大型甕棺は、他地域にみられない最大2mに達する巨大なもので、独特な形態をもちます。甕棺の製



甕棺の製作実験（左）と、窯で焼成する実験の様子（右）です。窯の奥に甕棺を入れ、手前に土器を入れる準備をしています。（写真右が筆者）

作方法に関する疑問は、2001年に羅州五良洞窯跡で大型甕棺を生産した窯跡がはじめて発見され、少しずつ解消しています。窯は天井と壁体をもつ構造で、内部から甕棺片が少量出土しました。生活用の土器を焼いた窯とは異なり、天井が高く床面の傾斜がゆるい、甕棺専用の窯でした。2007年からは五良洞窯跡の継続的な発掘をおこない、同時に大型甕棺の製作技術を復元するための実験考古学的な研究を進めています。

五良洞窯跡ではこれまで計77基の

窯が存在することを確認しました。このうち、25基が発掘調査され、甕棺専門生産集団の性格が明らかになりつつあります。また、甕棺の製作技術上の特徴を観察し、胎土の自然科学的分析、現代の甕器職人との協業などにより、甕棺製作技術の一端を明らかにしました。毎年甕棺の成形から焼成過程までの製作実験をおこない（写真）、実験考古学としての研究成果を蓄積しています。さらに、新石器時代以降の国内甕棺資料を体系的に集成し、国外甕棺資料と比較研究をおこなうため、中国・日本・ベトナムなどでの現地調査によって資料を収集するなど、多様な研究事業を進めています。

◆檀原考古学研究所での研修

韓国国立文化財研究所と檀考研との人的な交流は、2004年からおこなわれており、日韓両国の研究者の視野を広げるうえで役立っています。私は甕棺だけではなく、三国時代の土器の生産と流通に引き続き関心をもち研究したいと考えています。日本では大阪府陶器窯跡群を代表として多くの土器生産遺跡が調査されており、これをもとに土器の編年体系が構築されています。日本の須恵器生産導入期は韓国

李志映 氏

大韓民国 国立羅州文化財研究所

プロフィール

- 1981年大韓民国全羅南道木浦市生まれ
- 全北大学校考古人類学科硯土課程修了
- 木浦大学校考古人類学科博士課程単位取得
- 2012年度、大韓民国文化財庁国立文化財研究所に採用。現在、国立羅州文化財研究所学芸研究士。
- 研究テーマは、韓国湖南地方の原三国～三国時代の土器窯からみた、土器の生産と流通体系。
- 2017年1月より檀原考古学研究所研修

との関連性が強く、私は特にこの部分に注目して、両国の土器窯を比較しその発展様相を検討するつもりです。あわせて、五良洞窯跡のような生産遺跡の将来的な保存管理・整備案をつくるため、日本の優れた先行事例を学びたいと考えています。

現在は、檀考研で関連研究資料の収集をし、今回の研修目標に向けて準備する第一段階にあります。今回の研修が私の研究力量を高め、日韓土器生産体系の研究に貢献できるような意義深いものになることを願っています。最後になりましたが、日韓の研究交流のため、ご尽力いただいている両機関の所長をはじめ、関係者の皆様に感謝の意を申し上げます。

私の考古学の道：中国寧夏から日本橿原まで

◆寧夏の近年の考古学成果

一人の考古学を学ぶ者として、大学卒業後の私は、寧夏文物考古研究所の研究員となり、遺跡の調査と保護に従事してきました。特にここ数年は、寧夏靈武の後期旧石器時代遺跡の発掘、西夏王陵6号陵の発掘、固原南郊唐代壁画墓の発掘など、重要なプロジェクトに参加したので、以下にそれらの遺跡を紹介しておきましょう。

寧夏靈武の水洞溝遺跡は約13万年前の後期旧石器時代の遺跡で、銀川市東南25kmの黄河東岸に位置します。1923年、フランスの古生物学者ド・シャルダンとエミール・リサンにより発見されました。2003年か



固原唐墓での壁画の発掘（左：奥が筆者）と、研修で訪れた高野山にて（右）

ら現在まで、寧夏文物考古研究所と中国科学院古脊椎動物人類学研究所が合同して多くの地点の発掘を行い、大量の石器と動物化石が出土しました。ヨーロッパ旧石器と類似する形態の石器だけではなく、複数の地点から、華北小石器とよばれる大量の石器・骨角器および1万2千年前の典型的な草原細石器が発見されました。これらの石器に加え、穿孔されたダチョウの卵殻、動物骨片、灰燼層などの遺物・遺構が発見されたことで、当時の人々の移動や生産力のレベルだけでなく、美意識についても重要な手がかりを得ることができました。第25・7号地点の発掘に参加した私は、その成果を『水洞溝—2003～7年度考古発掘と研究報告—』と『寧夏通史・旧石器時代』のなかにまとめることができました。

西夏王陵は、寧夏の銀川市西側の賀蘭山麓に位置する西夏歴代皇帝の陵墓群です。11～13世紀に築造され、現存する最大規模の西夏文化の遺跡です。陵区には、9基の皇帝陵と253基の陪葬墓があります。2007～8年に私は、陵墓の保存整備事業の一環で、6号陵の遺跡範囲確認の発掘調査に参加しました。出土した遺物には、

大量の建物部材に加えて、漢文と西夏文字の碑片がありました。この碑片の銘文から、6号陵が太武帝（476～508）（1032年）の嘉陵であることが確認されました。その成果は、発掘調査報告書である『西夏六号陵』としてまとめられましたが、私もその執筆編集を分担することができました。

固原は、漢代以後、北朝隋唐期を通じて、シルクロード上の重要な拠点都市でした。20世紀の80～90年代、固原南郊から、北周の高官の墓地、ならびに隋唐期のソグド人の家族墓地が発見されました。これらの墓は、全国重点文物保护单位（日本でいうところの史跡）になり、さらに現在、固原シルクロード遺産として世界文化遺産に申請がおこなわれています。同申請作業のなかで、私は2014年に新たに発見された唐代壁画墓の発掘調査と保存修復作業をおこなうことができました。

◆寧夏と奈良をつなぐ古墳壁画

私は2016年8月に来日し、橿原考古学研究所で研修をおこなっています。その目的は、一つには日本考古学の理論と方法を理解することであり、もう一つは日本の古墳時代壁画墓の資料を収集し、隋唐壁画墓と古墳時代時

代壁画墓を比較研究することです。寧夏固原の唐墓では、墓室北壁に玄武が描かれています。同様のものが明日香村の高松塚古墳にもみられます。また、高松塚古墳の女子群像の描き方は、固原ソグド人の史氏家族墓のそれと類似しています。隋唐期の長安地域の墳墓壁画の題材は、7～8世紀に中国の広範に伝播しただけでなく、日本の古墳壁画にまで影響を与えていたことが理解されます。

このように、中日間では古代から密接な文化交流がおこなわれてきました。今日、私が日本で研修できることも、両国間の文化交流が絶えることなく続いてきたあかしであり、深く感謝しています。

馬曉玲 氏

中国寧夏回族自治区 寧夏文物考古研究所

プロフィール

- 1975年中華人民共和國新疆ウイグル自治区塔城市生まれ
- 吉林大学考古系考古学・博物館学専業（修士課程）修了
- 西北大学文化遺産学院研究生（博士課程）修了
- 中国寧夏文物考古研究所副研究員
- 研究テーマは、北朝・隋唐期の考古学研究。
- 2016年8月より橿原考古学研究所研修

催し案内

● 榎考研 附属博物館 特別陳列

「ヤマトの戦士―古墳時代の武器・武具―」

開催中

◇ 期間 平成29年2月4日(土) ～ 3月20日(月・祝)

◇ 内容 奈良県の古墳出土資料、また正確な考証のもとに製作された復元武器から、古墳時代の武器・武具発展の歴史を紹介します。

◇ 講座 榎考研講堂、3月19日(日) 午後1時～(正午開場)

● 榎考研 附属博物館 特別陳列

「さわって体感考古学!!」

開催中

◇ 共催 誰もが楽しめる「ユニバーサル・ミュージアム」

実行委員会

◇ 期間 平成29年2月4日(土) ～ 3月20日(月・祝)

◇ 内容 視覚障害がある方だけでなく、誰にでも楽しんでいたできるように、実物資料やレプリカ等のさわられる展示品を使って考古学に接し、体感する展示です。さわられる展示品、点字パネル、盛り上げ印刷と点字からなるパンフレットを使い、考古学の世界を紹介します。

● 室生埋蔵文化財整理収蔵センター 宇陀文化財講座第6回

「宇陀の考古と仏教美術(3)」

◇ 期日 平成29年3月18日(土) 午後1～3時(正午開場)

◇ 場所 榎考研室生埋蔵文化財整理収蔵センター

(旧室生高校) 講座室

◇ 交通 近鉄大阪線 室生口大野駅 南東徒歩15分

自家用車可(駐車場有)

◇ 講師 竹下 繭子(奈良県地域振興部文化資源活用課学芸員)

演題「飯降磨崖仏と古代の二仏崇拝」

菅谷文則(奈良県立橿原考古学研究所 所長)

演題「日本山岳寺院の開始時期をめぐって

―室生寺如意塔の和銅銀銭―」



『榎考研通信』 Vol.2

平成29年2月20日

編集・発行：奈良県立橿原考古学研究所
 奈良県橿原市畝傍町一番地
<http://www.kashikoken.jp>

印刷：株式会社 明新社



研究所 QR



博物館 QR



読者の皆様へ：本紙では地図QRコードを掲載していますが個人の責任で、スマートフォン等の地図アプリケーションをご利用ください。